

教育心理学

	単位数	履修方法	配当年次
	2	R or SR	1年以上
科目コード	FE2513	担当教員	白井 秀明



■科目の内容

「心理学」の中で最も有名な研究のひとつに、エビングハウスが行った記憶の研究があります。「ひとはなぜ忘れるのか?」という記憶や忘却のメカニズムをはじめ科学的に研究したからです。一方、その「心理学」の一分野である「教育心理学」では、同じ記憶や忘却を研究するのに、「どうしたら忘れなくなるか?」という発想をします。この発想の違いが、教育心理学とはどういう考え方をする学問か、ということを考える際の手がかりになると思います。えっ、まだよくわからないって……。

では、ズバリ言いましょう。教育心理学的に考えるとは、“学ぶ人の味方になって考える”ことなのです。子どもであれ大人であれ何かを学ぶ人は、まちがったりつまずいたりすることもある、それはきっと彼ら彼女らなりの理由があるにちがいない、その“言い分”にじっくり耳を傾けて、その対策を考えてみようじゃないか、というわけです。ですから、子どもに何かをわかりやすく教えたいと思っている先生、いやなにも学校教育に限らず、人と楽しく教育的なかわりを持ちたいと思っている人にとって、少しでも役に立つ知識や技術や考え方、そういうものを提供するのが教育心理学だと考えています（かなり私の希望が入っていますが）。

本科目で使用する教科書には、算数や国語などの具体的な教え方はほとんど書かれてありません。でも、“学ぶ人の味方になりたい!”と考えている人にとっては、大切な考え方や研究が数多く紹介されています。「ほほう、こういう考えや研究は学ぶ人に味方になっているな」などと読み進めていただければ、と思います。もちろん、ご自分の「教育」「学習」「発達」などに対する考え方とつきあわせて読むということも大切なことです。教科書に書いてある心理学者の名前や考え方をただ記憶するだけでは、教育心理学って面白いな!とは感じてもらえないと思うからです。

■到達目標

- 1) 人間の子どもが成長・発達していくことにとって「教育」が不可欠であることについて、具体例を挙げて説明することができる。
- 2) 「教育と発達の関係」について、2つの大きく異なる考え方を学び、どちらが“学ぶ人（子ども）の味方”になる考え方なのか、自分なりの理由を持って説明することができる。
- 3) 「学ぶ」というプロセスが「わかる」と「わからなくなる」の繰り返しであること、「つまずき」を学びのスタートにすることによって「学ぶ楽しさ」が生み出されること等の意味について、具体例を挙げて説明することができる。
- 4) 学校などで行われる授業も含めて、ある目的を持った活動を続けていくためには、「自己評価」が大切であることを、自分の仕事や生活の中にある目的的活動を例に説明することができる。

■在宅学習15のポイント

回数	テーマ	学習内容	学びのポイント
1	教育心理学とは何か (第1章)	教育心理学は、考えることだけに頼りがちな哲学とは異なる方法で人間にアプローチする学問であることを知る。また、誕生当初の主立った研究の概要から、教育や社会に役に立つ体系的な知識を求めて教育心理学がスタートしたことを知る。	教育心理学は、一般心理学とは異なり“2つの応用”という側面を持った心理学だと書いてあります。その意味について、誕生当初の諸研究を、社会や教育に役立つ知識を得るためにどのような方法で研究し、実際そういう知識が得られたのか、という視点から再検討してください。
2	心理学者の考え方のスタイルと教育観 (第2章)	クロンバック (L. J. Cronbach) が提唱した心理学についての3つの考え方の違いを知る。また、エルカインド (D. Elkind) の2つの教育観の違いを知る。それらにより、教育心理学は「よい教育とは」という価値から離れることはできないことについて考える。	人間観 (人間とはどういう存在か)、研究観 (研究にとって何が大切か) によって、心理学を大きく3つにわけています。大きく2つにわけた教育観は、それらの3つのどの考えに強く影響されているのかについて整理してください。さらに、ご自分の考え方がどれに近いのか考えてみると楽しくなります。
3	行動主義の学習心理学とその応用 (第3章)	2種の条件付けの違いについて具体例を挙げて説明する。また、行動主義の技法の応用の実際を知り、メリットとデメリットについて考える。特に、プログラム学習と「応答的な環境」の相違点について説明できる。	2種類の条件付けの違いは、もとなる反応が「受動的か、積極的か」です。さらに、「できる」を少しずつ積み重ねていくことがプログラム学習の特徴ですが、「応答的な環境」は、賞を期待したり罰を避けることによって行動を形成する学習ではありません。大切なことですので、両者の異同についてじっくりと考察してください。
4	学習の認知理論 (第4章)	「認知主義の学習」は、第3章の「少しずつ行動を変化させる」という「行動主義の学習」とは何が異なるのか説明できる。人間や人間に近い動物は、部分をみる、機械的に記憶する、試行錯誤 (行き当たりばったり) するなどよりも、心のなかにある仕組みを使ってうまく行動できることを知る。	「見る」という感覚から情報を入力するだけで捉えがちなことが、心の仕組みを使って「考える」とそれほど明確に区別がつかないことに気がついて欲しいです。今まで出会ったことのない「問題」を解決するのも同じことですね。
5	発達の心理学①発達の考え方の変遷 (第5章)	ピアジェ (Piaget. J) が想定している「認知構造の発達段階」について、普遍性の高い理論をつくらうとしたことからくる特色や問題点を説明できる。また、さまざまな観点から検討課題が残されていることについて知る。	子供は大人とは違った見方、考え方をすることを示したことが、ピアジェの最大の貢献です。しかし、人間の発達を考える上で検討課題も多々残したことも事実です。それぞれ具体的に説明できるようになって欲しいです。

回数	テーマ	学習内容	学びのポイント
6	発達心理学②新しい発達の考え方 (第6章)	ヴィゴツキー (Vygotsky, L. S.) が想定した人間の発達についての考え方について知り、人間が作り出してきた文化、社会そして教育と人間の子供が発達する過程が、どういう関係にあるのか説明できる。特に、ピアジェの考え方とどこが異なるのか自分なりに説明できる。	ヴィゴツキーの発達理論は、教育（文化、言語、等の獲得）が発達をつくるという考えです。発達段階に合わせて（丁度いい段階に来るまで待って）教育をする、というピアジェの考え方とは大きく異なりますね。
7	動機づけの心理学 (第7章)	動機づけの考えの基になった「ホメオスタシス」という生理的なメカニズムについて知る。また、そこから考え出された「社会的強化」という動機づけによって説明できる行動もあるが、「好奇心」や「達成動機」など他の心の働きによっておきる行動の方が多いいことを、それら用語の意味と共に具体的に説明できる。	「ホメオスタシス」という生理的な平衡状態を保つメカニズムを手本にした「社会的強化」では、人間の心の中にある「やってみよう」「おもしろい」「楽しい」を説明しようとしても、上手くいかないことに気づいてください。どうしても、「好奇心」や「達成動機」等の他の心の働きに言及しないと説明できない行動があるのです。
8	自主性と意欲 (第8章)	「自己原因性」という言葉の意味について理解を深める。その上で、達成行動における2種類の目標と行動の特徴と2種類の知能観について、対比的かつ具体的に説明できる。	人間は誰かに言われてする（やめる）ことが生来的に嫌いなのであり、本来は自分の行動の原因主体であることを望んでいる、という考えに対する理解を深めてください。他者に対する自分の行動の振り返りの視点になります。
9	人間観と教育① (第9章)	3つの人間観があることを知り、その上で時代や社会の構造の変化と、その時代に求められた人間観の変化に対応関係があることについて説明できる。	「いくつもの教育心理学がある」というのがこの教科書の立場です。それら「いくつも」の違いが出てくる根本にあるのが「人間観の違い」です。①では行動主義的な人間観について注目して、教育に対する考え方の違いについて整理をしてください。
10	人間観と教育② (第10章)	3つの人間観があることを知り、各自が持つ人間観が異なることによって、知識、学習、動機づけ、学習環境、教育評価、教師といった教育に登場するキーワードに対する意味づけが異なっていることについて意識でき、その違いを対比的に説明できる。	②では、認知主義、状況主義の人間観から見た場合の教育に対する考え方の違いについて整理をしてください。
11	教育評価とは何か (第11章)	教育評価には大きな2つの目的があることを知る。また、手段としての教育測定について測定結果を表現する2つの準拠方法の違いについて説明できる。	形成的評価、総括的評価、あるいは相対的評価、絶対的評価など、意味の曖昧な用語が教育の中で使われているのが現状です。ここで言う2つの準拠方法の違いや評価の利用計画、評価方法、評価主体、評価結果を利用する人等の違いによって、それらを整理できるようになって欲しいです。

回数	テーマ	学習内容	学びのポイント
12	記憶の心理学と教育 (第12章)	無意味綴りを用いた記憶のメカニズム (第1章pp. 16-18参照) や記憶過程のモデルを「研究」しただけでは、私たちが日常使っている言葉や経験したことを使って考えるための記憶研究にはならないことを知る。	教育に役立つ記憶の研究には、普段私たちがする「考える」「推論する」「創造する」などの心の働きと切り離れた「記憶のみ」の研究では不十分であることに気づいて欲しいです。
13	知能と創造性 (第13章)	「知能」は多面的、多角的に捉える必要があることを知る。知能テストについて実施目的や結果の使われ方が歴史的に変わってきたことを知る。創造性についても、さまざまなとらえ方があることを知る。	「知能」や「創造性」という言葉で表そうとしている心の働きは、まだまだ心理学の中で共通した考え方はありません。両者を区別することも賛否両論です。対象となる課題分野やその人が育ってきた文化などに影響を受けない「知的な能力」を測るテストなどそう簡単にはつくれないことに気づいて欲しいです。
14	道徳性の心理学と教育 (第14章)	「道徳性」という心の働きの質的な変化としての発達や変化を起こすための経験や環境の与え方 (広い意味での教育) などについて、どのような研究がなされてきたかを知る。	「道徳性」を、きまりにしたがう、先生や親のいうことにしたがうなど、広い意味で「考える」という心の働きと切り離して捉えることはできないことに気づいて欲しいです。
15	教育方法の分析 (第15章)	発見学習をめぐる議論から、2つの異なる「方法」による「学習」の成果を比べるという研究だけでは、教え方の善し悪しを判断するのは難しいことを知る。学習に影響を与える4つの要因について知る。	教育について議論するには「学習の方法」だけでは十分でなく、何を学習したのか、どんな学習をしたのか、といった「学習の内容」についても考えていく必要があるということに気づいて欲しいです。

■レポート課題

※ワープロ・パソコン印字での提出はできません。手書きにて作成してください。

1 単位め	「知識観」「学習観」「動機づけ観」「学習環境観」「教育評価観」「教師観」からひとつ選んで、「行動主義」と「認知主義」の考え方の違いを、具体例を挙げながら説明しなさい。 ※スクーリング受講者専用「別レポート」対象課題・web解答可
2 単位め (課題1, 2選択)	課題1 (教職免許状取得希望者以外はこちらを解答すること) ヴィゴツキーの「発達の最近接領域説」は、どんなところが“学ぶ人の味方”になっている考え方か。ピアジェの「発達段階説」と対比させて説明しなさい。 課題2 (教職免許状取得希望者はこちらを解答すること) 「学習障害 (LD)」「注意欠陥多動性障害 (ADHD)」のどちらかひとつを選び、そうした障害を持つ児童・生徒の行動特徴を整理し、もし自分が彼ら彼女らの担任になったら、どんなことを大切にしておきたいかについて述べなさい。

■アドバイス

レポートを書くにあたって、教科書だけに頼るのではなく、教科書や文末に紹介されている参考文献などからの“輸入”は大歓迎です (“輸入元”はレポートに明記してください)。“わかること”と“わからなく

なること”が交互に繰り返される、それが何かを学ぶ筋道だと考えるからです。

1単位め アドバイス

「～観」というのは、ものごとに対する見方、考え方のことです。「行動主義」と「認知主義」では、学習についてだけでなく、さまざまなことに関する考え方が異なります。教科書の3章、4章だけでなく、9章や10章にも、両者の違いが書かれてあります。まず、これらを読んで両者の違いについて整理してください。

それから、課題に書いてある「知識観」～「教師観」の中からひとつ選んで、ご自分が読んだり、見たり、聞いたりしたこと、特に、今までのご自分の教育体験の中で、「行動主義」と「認知主義」の考え方のそれぞれに当てはまる具体例をさがしてください。なにもかたく考える必要はありません。「こんな先生がいたけど、これは行動主義的な考え方をもった先生だったのではないか」とか、「生徒のやる気を出すためにこんなことをした先生がいたけど、これは認知主義が主張する内発的動機づけになっていたのではないか」とか「今まで自分は勉強するってこう考えてやってきたけど、そういう考えって行動主義的な学習観になっていたのではないか」とか「こういう問題を解いているときに、こういう“ああーわかった！体験”をしたけど、認知主義の先駆であるゲンタルト心理学が主張した洞察のことだったのか」などなど、自由にそして大胆(!?)に、具体例探しをしていただきたいのです。面白いエピソード、お待ちしています。

2単位め 課題1 アドバイス

ポイントは、「発達」に対する「教育」の役割を、両者がどう考えているかです。もちろん、ここでいう教育とは、学校教育だけでなく、社会的・文化的経験などを含めたもっと広い意味での教育活動のことです。間違いやつまずきを示す、いいかえると、発達が滞っている人に対して教育活動を受動的・消極的にとらえているのはどちらでしょうか。能動的・積極的にとらえているのはどちらでしょうか。まず、「教育」と「発達」の関係に対する両者の考え方の違いを対比的に示して欲しいのです。そして、両者の「教育」と「発達」の関係に対する考え方とご自分の考えとつきあわせた結果、自分は「教育」「発達」についてどう考えるか（考えられるようになったか）も、ぜひお書きいただきたいと思います。

2単位め 課題2 アドバイス

教員免許を取得なさりたい受講者への課題です。まず、発達や学習、さらにコミュニケーション等の面で、こうした障害を持つ子どもたちがどういう行動をしがちなのか、その特徴を調べて整理してください。その上で、自分がそうした子どもの担任になったら、その子どもにとってよりよい成長を少しでもうながすために、どういうことに注意してかわる必要があるのか、いろいろ調べたり考えたりしていただきたいのです。その際、学級の中だけでなく、学校という組織の中、さらには学校外の専門機関との連携など、視野を広げて考えてください。

なお、この課題に取り組むにあたって、教科書ではなく、ご自分で参考となる本を見つけていただきたいのです。いわゆる専門書でなくてもかまいません。もちろん、やさしく書かれてあると思う何冊かは、参考図書として次頁に挙げておきました（こうした障害を持つ子どもやその親を支援する団体が開設しているホームページなどにも、やさしい解説や参考図書などが紹介されています）。これら以外にも参考になる本はたくさん見つけれられると思いますが、いきなり専門的な本に手をつけるのではなく、入門書的な、

そして、なるべく具体的にやさしく書かれてある本を何冊かみつけて、まず全体を一読することをお勧めします。そうすることで、障害の種類による違いだけでなく、いわゆる障害を持つ子どもたちとかがかわる際に共通して大切な見方、考え方がおわかりいただけるのではないかと、思うからです。

■科目修了試験 評価基準

- ・問題によって設定されたこと（異同点を延べよ、違いを明確にせよ等）について、的確な言葉を使って論理的に説明されているか。
- ・具体例を挙げて、となっている設問には、①読み手にわかるように、②的確な具体例を挙げてあるのか。

以上の観点によって、科目修了試験100%で評価を行う。

■参考図書

園田富雄監修・著 山崎史郎編著『新版教育心理学ルック・アラウンド——わかりたいあなたのための教育心理学』ブレーン出版、1992年

教育心理学の主な領域の内容が網羅されています。初学者が、教育心理学の全体的な骨格を知るには適書だと思います。

宇野忍編『授業に学び授業を創る教育心理学 第2版』中央法規出版、2002年

題名からわかるように、授業実践の実例を豊富に取り上げながら教育心理学の諸問題について書かれています。と同時に、学習者の味方になって授業を創っていこうという姿勢が貫かれている、とも言えるでしょう。教員志望の方にはぜひともお読みいただきたい一冊です。

永野重史著『教育心理学通論——人間の本性と教育』放送大学教育振興会、2001年

教育心理学の再入門のために書かれた本です。「教育」「学習」「発達」などに関するご自分の考えをさらに整理する目的でお読みいただけたら、と思います。

参考図書（2単位め 課題2）

辻井正次編著『特別支援教育 実践のコツ 発達障害のある子どもの<苦手>を<得意>にする』金子書房、2011年

茂木俊彦監修、上野一彦編、稲沢潤子文、オノピン+田村孝絵『子どものためのバリアフリーブック 障害を知る本⑧ LD（学習障害）の子どもたち』大月書店、1998年

上野一彦・中根 晃責任編集『わかるLDシリーズ① LDとは何か 基本的な理解のために』日本LD学会編 日本文化科学社、1996年

リンダ・J・フィフナー著 上林靖子・中田洋二郎・山崎透・水野薫監訳『こうすればうまくいく ADHDをもつ子の学校生活』中央法規出版、2000年

アリソン・マンデン&ジョン・アーセラス著 市川宏伸・佐藤泰三 監訳 紅葉誠一訳『ADHD注意欠陥・多動性障害 親と専門家のためのガイドブック』東京書籍、2000年

田中康雄 『ADHDの明日に向かって——認めあい、支えあい、赦しあうネットワークをめざして』 星
和書店, 2001年

参考になるホームページ

NPO法人 えじそんくらぶ <http://www.e-club.jp/>

NPO法人 アスペ・エルデの会 <http://www.as-japan.jp/>